

平成30年6月6日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26284042

研究課題名(和文) イギリス近代文学における植物表象の史的発展 資源と欲望をめぐって

研究課題名(英文) The historical development of plant representations in modern British literature concerning natural resources and human desires

研究代表者

石倉 和佳 (Ishikura, Waka)

兵庫県立大学・環境人間学部・教授

研究者番号：10290644

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、イギリス近代の文学や視覚芸術に見られる植物表象を植物学、植物書、科学史等の文脈から多角的に考察し、植物表象が資源や権益をめぐる社会の権力構造やその構造から生まれる個人の欲望と連動して形成されていることを検証したものである。これは、文学等に表現された草木等の自然が、資源としての各種の植物の価値と相補関係にある文化・社会的構築物であることを明らかにすることでもある。本研究では17世紀から19世紀初頭までのロマン主義期に至る代表的な植物学者や園芸家に焦点をあて考察し、ロマン主義期に至る文学における自然が、歴史的な相対化によって批判的に考察されるべきものであることを明示するものとなった。

研究成果の概要(英文)：This research project explored plant representations in modern British literature and art in the social and scientific contexts of botanical and horticultural development, to set them as complementary to the human desires for natural resources which were derived from societal power structures. This project also endeavored to reveal that natural representations in literature and the arts were structured as correlative to the values of plants as resources. In this research, we also investigated various botanical scholars, horticulturalists and scientific patrons of plant cultures in the 17th, 18th and early 19th centuries, to detail how these social and scientific contexts influenced individual endeavors to delineate plants and their related information in the scientific or artistic fields. The results highlighted that literary representations of nature until the Romantic era were open to scrutiny and supported by historical objectification.

研究分野：ロマン主義期を中心としたイギリス文学

キーワード：イギリス文学 植物学 植物書出版 ロマン主義 科学史 王立協会 植物園 プラントハンター

### 1. 研究開始当初の背景

イギリス近代文学における植物表象は、植物学や園芸、また植物を描いた視覚芸術などの社会・文化的文脈が明らかであるにもかかわらず、十分に歴史的、思想的に掘り下げられていない状況であった。17世紀以降の科学的関心の広まりは植物学の発展を促し、緻密な自然観察は植物画の質を高めると同時に文学者の植物描写にも影響したと推測できるが、そうした文化的に異なる知的関心領域の相互作用が、植物表象を考える際にどれほど勘案されてきたのかについては殆ど文学研究領域においては具体的な成果が見られなかった。植物表象が潜在的に関係する社会・文化的文脈を明らかにし、個別の事象について検討することが、近代イギリス文学の表現の射程を深く理解することにつながると考えられた。

### 2. 研究の目的

本研究では上記の問題を踏まえて、イギリス近代文学における植物表象を、植物学、植物書、科学史等の文脈から多角的に考察することを目指した。そして、特に18世紀以降、植物表象が資源や権益をめぐる社会の権力構造やその構造から生まれる個人の欲望と連動して形成されていることを検証し、文学における自然表現が、資源としての各種の植物の価値と相補関係にある文化・社会的構築物であることを明らかにすることを目指した。これは、ロマン主義期にいたる文学における自然を、歴史的な相対化によって批判的に考察することにもつながるものである。

### 3. 研究の方法

本研究の遂行方法は文献調査であり、研究発表、論文作成を行うことと同時に、大英図書館で史料調査を行い、各種書誌リストを参考にして書誌情報の整理のためのデータベース作成を行った。毎年国際学会において研究発表を行うとともに、国内で定期的に研究会を開き、本研究のテーマおよび関連の内容についての研究発表を行った(イギリス・ガーデン研究会)。まとめられた成果は、しかるべき論文誌に掲載されるとともに、『ガーデン研究会ジャーナル』に集約し発行した。

### 4. 研究成果

本研究の成果発表の場として雑誌発行を当初から計画し、投稿規程を設け、この課題による研究活動の成果を広く掲載する方針をとった。基本的事実の理解における錯誤が見受けられる場合などを除き、ほぼ全ての投稿論文を査読の上掲載した。このような手法をとったのは、この研究テーマによる成果を集約させるという目的に加えて、このテーマが学際的であり、各分野に閉じてしまいがちな専門の学術雑誌においては公開まで時間がかかることが考えられ、現在進行形の研究成果を独自に情報発信するほうが良いと判

断したためである。このようにして本研究の研究成果は、主に『ガーデン研究会ジャーナル』1~4に纏められるとともに、ジャーナルホームページで公開されている。以下は、研究内容の概略である。

イギリスにおける17世紀以降の植物学の研究については、これまで文学研究の中でほとんど考察されることがないため、まずイギリスで出版された植物関係の書籍の変遷を調べた。植物学出版の歴史には、分類学、印刷技術、読者層などの変遷が関与しているが、イギリスにおいて文化形成への影響関係が明らかであるのは分類学である。植物分類学は17世紀までは各種の自然分類法が採用されていたが、18世紀になるとトゥウルヌフォールの花の形を主とした人為分類法が広く受容されるようになり、イギリスでもそれは世紀の中ごろを過ぎるまで続いた。その後、おしべとめしべの数により植物の分類を行うリンネ分類の受容がイギリスで積極的に行われたが、それはジョセフ・バンクスが王立協会会長であった時期(1778-1820)に顕著となっている。本研究ではこの時期、イギリスにおける植物学が国富の営みとして捉えられるようになったこと、リンネ分類学への忠実な態度が植物学として正統と考えられたことを重要視し、植物学をめぐる権力構造について考察を行った(雑誌論文、研究発表など)。また、ジョン・レイ、フィリップ・ミラー、ウィリアム・カーティス、J.C.ラウドンなど、イギリスにおける博物学者、園芸家などを個別に考察し、時代的文脈と合わせて検討した(雑誌論文、②など)。これらの検討を加えた人々はほぼ例外なく分類学の成立や変化に関わっているか、もしくは実際の園芸上の事実と分類学上の知見との差異に対応を迫られているかであった。総合的に見ると、植物学の書籍や植物への関心を綴った文章がどのような文脈で読みうるかについては、それらが書かれた時代の社会状況全般を勘案した複合的な視点から考察しなければならず、ロマン主義期に植物学が大衆化していく時に至って初めて、植物学的知見は文学領域に取り込まれていったと考えられる。

イギリス国内での事項の検討に加えて、フランスの植物学との関係、またロマン主義期以降のアメリカでの博物学等について、本テーマの発展として検討した(雑誌論文、研究発表など)。他には、18世紀初頭の未知の土地への興味関心の様態、およびその後海洋情報が精緻化していく点を示す事例や(雑誌論文)、アメリカにおける緑の価値への考察(雑誌論文)、デザイン化された植物表象への考察(雑誌論文)などがあった。植物表象の問題については、イギリス国内のみならず大陸からの影響やアメリカでの受容の形態など様々な角度からの考察がありうるということが分かったが、イギリスとの政治的関係により相互の影響の

あり方も大きく変化を強いられた点に注意を向ける必要がある。アメリカ独立戦争をはさんで、アメリカからの草木輸入に変化が起き、ナポレオン戦争期には英仏の植物学ネットワークは大打撃をうけている。イギリスを中心に見た場合、リンネ植物学の牙城としてヨーロッパにまで影響を振った点を重要視する必要があるが、逆の見方をすれば、ヨーロッパやアメリカでの植物学的、園芸上の関心は、イギリスとは違う行きかたをしたと考えられ、分類学の場合に見られるように、イギリスにおける植物学、園芸については、イギリス以外の地域からみた文脈によって相対化される必要があるといえる。

植物学関係の書誌情報については、17世紀までは英語で書かれたものは数が少ないが、18世紀になると次第にイギリス各地の植物誌などが制作されるようになる。18世紀中ごろまではラテン語のものも散見するが、イギリス以外のヨーロッパ各地での出版も目に付く。18世紀後半になるとリンネ分類に基づいた英語による書籍は圧倒的な数となるが、異なる分類法の提案やリンネ分類の部分的修正を提示したものもある。本研究期間中に収集した書誌情報については、出来る限りインターネット上で公開されているものを取り込んだ。版違いのものなどもあるが、およそ8割の書籍がネット上で閲覧できるようになっていた。今後はこの資料を用いて植物書の出版史について何らかの視点から考察を続ける予定である。

ウィリアム・カーティスの園芸家としての活動、および彼が運営した植物園付属の図書室の書籍について検討した(雑誌論文、  
、  
、  
②)。付属図書室の書籍については、書籍の追加情報も含めてリスト化し、会員情報についても考察を加えた。この植物園の蔵書については、英語圏でも十分な研究がなく、18世紀末における植物出版の様態を知るためにも重要なものとなっている。

文学作品を中心テーマとし、そこに庭や植物表象がどのように現れているかについてはいくつかの考察がなされた(雑誌論文、  
、  
、  
、  
研究発表、  
など)。また、文学研究における植物表象を考えるに当たって、文学研究に見られる非歴史的態度の功罪についての考察も行った(雑誌論文)。これらの考察は今後さらに深められる必要があると考えられる。文学に現れた植物の表象は、その背景に植物学や植物の育成に関わった人々が残した様々な観察や思想とのつながりを読むことが可能であるからである。なお、国際学会での研究発表論文のうち、  
、  
、  
については、『ガーデン研究会ジャーナル4』に英文原稿が採録されている。

本研究の成果として最も重要な点の一つは、イギリスにおける植物学に関する知見を、代表的な園芸家、植物学者への考察を通してまとめ得たこと、および植物表象に関する考察の射程を、イギリスに限らずヨーロッパ

およびアメリカに広げたことである。17世紀、ジョン・レイの時代にはすでに植物を通じた情報伝達のネットワークがグローバル化しつつあったが、ヨーロッパの植物研究に追いつつ、ジョン・レイに見られるような自然神学の思想が生み出されたことは、イギリスの思想的形態として特徴的である。また、植物資源への関心が高まる中で、イギリスがリンネ分類学の中心地となることで他国への学術的優位性を持ちえたことが国富的利権と結びついていたことは、イギリス・ロマン主義期の植物表象を考察する際に念頭に置かねばならない事項である。そしてそうしたイギリスにおける植物表象の特徴が、大陸およびアメリカにおいては別途の展開を見せていることもさらに掘り下げられなければならないだろう。この点は単に植物表象の考察のみならず、地球上の各地域において自然や科学を近代社会がどのように理解する/理解しようとしたのかという問題と無縁ではないからである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 28 件)

石倉和佳、「イギリス近代における植物表象—植物学と出版文化の発展において」、『ガーデン研究会ジャーナル4』、2018、pp.1-18

石倉和佳、「カーティスのブロンプトン植物園と会員たち」、『ガーデン研究会ジャーナル4』、2018、pp.19-36

杉山真魚、「自然と模様について—柳宗悦と英国の関係をめぐって—」、『ガーデン研究会ジャーナル4』、2018、pp.37-46

三田村哲哉、「戦間期コート・ダジュールの保全と開発」、『ガーデン研究会ジャーナル4』、2018、pp.47-49

大橋完太郎、「怪物・化石・恐竜 - フランスにおける近代自然史の展開から」、『現代思想』、2017年8月臨時増刊号、217-223

石倉和佳、「J・C・ラウドンと園芸ジャーナリズム」、兵庫県立大学環境人間学部研究報告、19号、2017、pp.119-133

杉山真魚、「19世紀末英国の植物模様」、『ガーデン研究会ジャーナル3』、2017、pp.1-10

鷲津浩子、「アンドリュー・ジャックソン・ダウニングに関する覚書」、『ガーデン研究会ジャーナル3』、2017、pp.11-16

大橋完太郎、「ビュフォンと英国(1)1730年代半ばまでの知的動向」、『ガーデン研究会ジャーナル3』、2017、pp.21-26

石倉和佳、「ウィリアム・カーティスの植物園」、『ガーデン研究会ジャーナル3』、2017、pp.27-48

石倉和佳、「カーティスのブロンプトン植物園付属図書室について」、『ガーデン研究会ジャーナル3』、2017、pp.49-65

Hiroko Washizu, "Virtuous/Poisonous Potency: Toxicology in 'Rappaccini's Daughter,'" 『アメリカ文学評論』、25号、2017、pp.205-211

石倉和佳、「サルマナザールと啓蒙の知のかたち」、『ガーデン研究会ジャーナル 2』、2016、pp.1-24

大橋完太郎、「近代フランスにおける王立庭園の創設(1) - ファゴンからビュフォンへ」、『ガーデン研究会ジャーナル 2』、2016、pp.29-37

鷺津浩子、「アメリカの庭園 / 庭園のアメリカ」、『ガーデン研究会ジャーナル 2』、2016、pp.39-45

田吹長彦、「イギリスロマン派詩人口ード・バイロンとニューステッドアピイ」、『ガーデン研究会ジャーナル 2』、2016、pp.51-68

今村隆男、「R. P. ナイト『風景』とピクチャレスク」、『和歌山大学教育学部紀要』、66号、2016、1-16

石倉和佳、「植物表象とイギリス近代文学—文学研究における歴史主義をめくって」、『ガーデン研究会ジャーナル 1』、2015、pp.1-24

大橋完太郎、「近代フランスにおける王立庭園の創設 - ラ・ブロスからファゴンの時代」、『ガーデン研究会ジャーナル 1』、2015、pp.29-39

梶理和子、「公園、庭、オレンジ—王政復古期における女性のセクシャリティ表象」、『ガーデン研究会ジャーナル 1』、2015、pp.41-51

① 石倉和佳、「ウィリアム・カーティスの『ロンドンの植物』 - 自然と分類学のあいだ」、『ガーデン研究会ジャーナル 1』、2015、pp.53-65

② 今村隆男、「メイスン『英国庭園』の多様性」、『和歌山大学教育学部紀要』、2015、pp.37-50

〔学会発表〕(計 22 件)

Hiroko Washizu, Death in the Garden British Association for Romantic Studies (BARS): Romantic Improvement, 2017

Kantaro Ohashi, Imagination Improved: Buffon's Implicit Influence in British Romanticism, (BARS: Romantic Improvement), 2017 [read by Alex Watson]

Waka Ishikura, J. C. Loudon, Green Spaces, and Social Improvement, BARS (Romantic Improvement), 2017

石倉和佳、「コールリッジと」J. C. ラウドン—誰が彼らの著述を読むのか」、『第 43 回イギリス・ロマン派学会全国大会』、2017

大橋完太郎、「ビュフォン博物学の形成—ブルゴーニュとブリテンとの影響から」、『第 11 回イギリス・ガーデン研究会』、2017

三田村哲哉、「風景画家フォレストイエから建築家プロストへ—20 世紀前半のフランスにおける都市計画の新たな展開」、『第 11 回

イギリス・ガーデン研究会』、2017

石倉和佳、「R.J. ソーントンの植物学くじ—『フローラの神殿』の顛末」、『第 11 回イギリス・ガーデン研究会』、2017

杉山真魚、「『静動一如』の自然観—民藝の思想と 19 世紀末英国—」、『第 11 回イギリス・ガーデン研究会』、2017

Waka Ishikura, Coleridge, Sir Joseph Banks, and Discontent Botanists in the Romantic Age, North American Society for the Study of Romanticism (NASSR): Romanticism and its Discontents, 2016

Hiroko Washizu, In Matters of Spirits: Forensics of Intemperance in Edgar Allan Poe's Tales, International Association of University Professors of English, 2016

杉山真魚、「ウィリアム・モリスと植物」、『第 10 回イギリス・ガーデン研究会』、2016

山口善成、「ビーバーとミツバチとバイオリン弾き：ジェレミー・ベルナップのアメリカの森の歴史」、『第 10 回イギリス・ガーデン研究会』、2016

Waka Ishikura, Why Daffodils? Wordsworthian Flowers and the British Botanical Readership, BARS: Romantic Imprints, 2015

Kantaro Ohashi, L'Encyclopédie et l'Histoire de l'Académie royale des Sciences autour du Jardin, L'Encyclopédie et l'Histoire de l'Académie Royale des sciences de Paris, L'ENS de Lyon (リヨン、フランス)、2016

石倉和佳、「ジョセフ・バンクスとフランスの植物学者たち」、『第 9 回イギリス・ガーデン研究会』、2015

鷺津浩子、「アメリカの庭園 / 庭園のアメリカ」、『第 9 回イギリス・ガーデン研究会』、2015

山内朋樹、「ガーデネスクから野生の庭へ—十九世紀の植物の混淆を背景として」、『第 9 回イギリス・ガーデン研究会』、2015

野間晴雄、「稀少植物の塊集・移植をめぐるローカル / グローバルネットワークと植物園」、『第 8 回イギリス・ガーデン研究会』、2015

橋セツ、「ニューステット・アペーの庭園の変遷について—バイロン家の庭園管理を中心にして—」、『第 8 回イギリス・ガーデン研究会』、2015

真木利江、「クレアモント庭園について」、『第 7 回イギリス・ガーデン研究会』、2014

① 大橋完太郎、「フランス王立庭園と博物学—トウルヌフォールからビュフォンへ—」、『第 7 回イギリス・ガーデン研究会』、2014

② 石倉和佳、「ウィリアム・カーティス『ロンドンの植物』 - 自然と分類学のあいだ」、『第 7 回イギリス・ガーデン研究会』、2014

〔図書〕(計 4 件)

石倉和佳 (編)、ブックウェイ、『ガーデン

研究会ジャーナル 1 ㍲、2015、66 頁(ISBN: 9784865840285)

石倉和佳(編) ブックウェイ、『ガーデン  
研究会ジャーナル 2 ㍲、2016、69 頁(ISBN: 9784865841237)

石倉和佳(編) ブックウェイ、『ガーデン  
研究会ジャーナル 3 ㍲、2017、67 頁(ISBN: 9784865842425)

石倉和佳(編) ブックウェイ、『ガーデン  
研究会ジャーナル 4 ㍲、2018、77 頁(ISBN: 9784865842852)

〔その他〕

ホームページ等

ガーデン研究会ジャーナル

<http://gardenjournal.jp/journal/>

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

石倉 和佳 (ISHIKURA, Waka)

兵庫県立大学・環境人間学部・教授

研究者番号：10290644

### (2)研究分担者

鷺津 浩子 (WASHIZU, Hiroko)

筑波大学・人文社会系、教授

研究者番号：30149372

大橋 完太郎(OHASHI, Kantaro)

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：40459285

今村 隆男 (IMAMURA, Takao)

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号：90193680

### (3)連携研究者

杉山 真魚 (SUGIYAMA, MAO)

岐阜大学・教育学部・准教授

研究者番号：70625756

梶 理和子 (KAJI, Riwako)

山形県立保健医療大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：60299790

### (4)研究協力者

城山 豊 (SHIROYAMA, Yutaka)

兵庫県立大学・緑環境景観マネジメント研究科・教授

田吹 長彦 (TABUKI, Nagahiko)

北九州市立大学・名誉教授

橘セツ(TACHIBANA, Setsu)

神戸山手大学・教授

野間晴雄(NOMA, Haruo)

関西大学・教授

三田村 哲哉(MITAMURS, Tetsuya)

兵庫県立大学・環境人間学部・准教授

真木利江(RIE, Maki)

広島女学院大学・教授

山口善成(YAMAGUCHI, Yoshinari)

高知県立大学・准教授

山内朋樹 (YAMAUCHI, Tomoki)

京都教育大学・講師